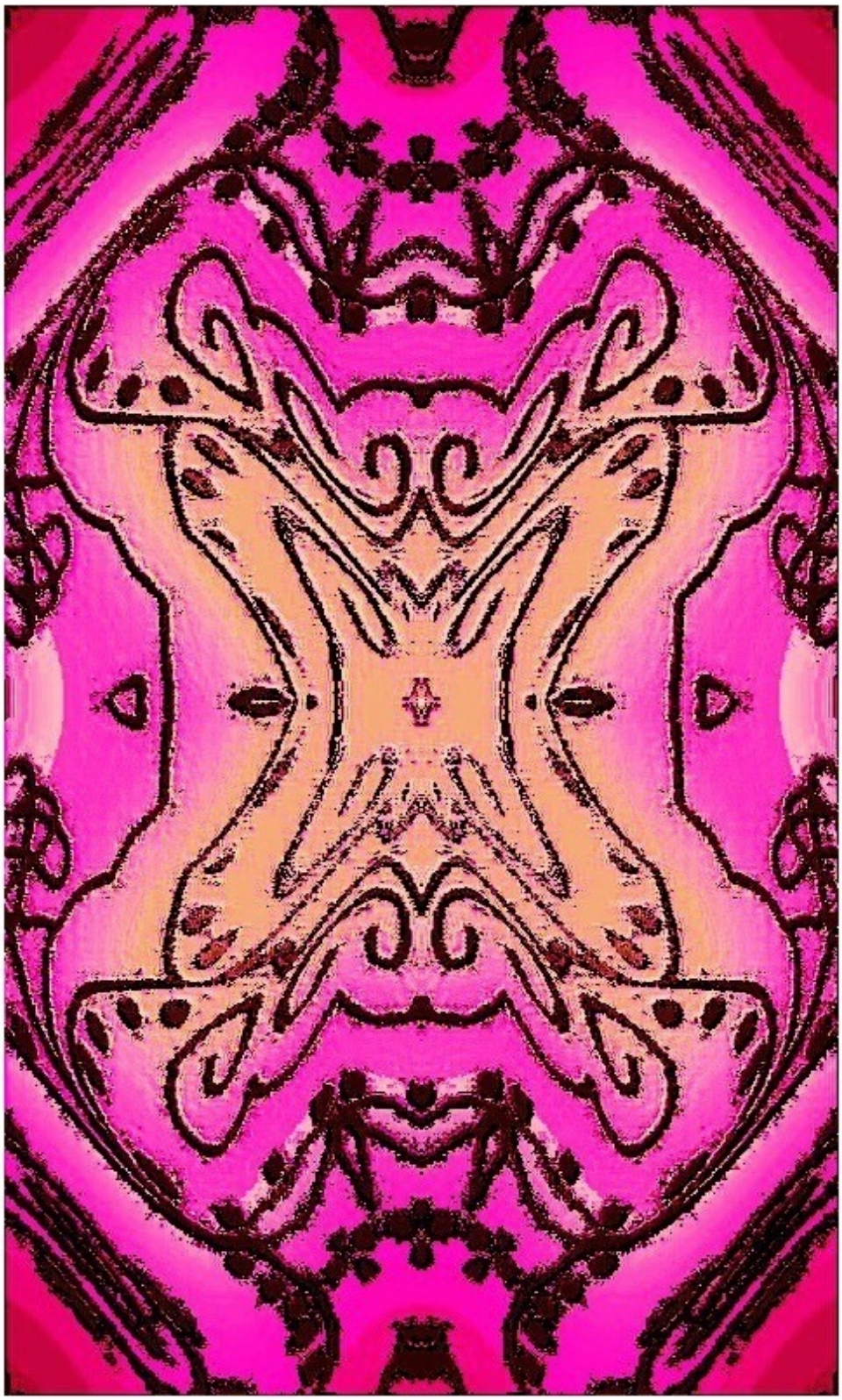
笛の音に導かれて



mikatuki98

「プ～～～♪」
一吹き、大きな穴に顔を近付け、なんとなく見覚えのある女が笛の音を鳴らした。
『わぁ～なんて大きな穴……それよりもなんて大きくて長い笛？』
笛の音に導かれるように忽然と現われた光景に私の目は釘付けになっている。そこには人間の胴よりも太い竹製の横笛が宙に浮いたように横たわり、七つの指穴の前には一人ずつ人間が並んでいる。

「プ～プ～♪」
再び音がなり、次々と鳴った音がメロディーを奏で始めた。　七人夫々が自分の番になると、担当の大きな笛の穴を塞いでは音階作り出しているようだ。
『それにしても、穴に顔を近付けているようだが、まさか顔で穴を塞いでいるのだろうか？』
瞬間芸みたいで私にはよく分からない。
『何だか面白いなぁ～』
初めて体験する不思議な光景と音色に、私はただボンヤリとその場に立ち竦んでメロディーに聴き入っていた。
ところが、横笛を演奏している人間たちをよくよく見ると、全員が学生時代の友人たちであることに気が付いた。
『あ、あの頃の……』
そう思った瞬間、耳にメロディーの余韻を残しながらも私は何処か見知らぬ路地に入り込んでいた。

そこは時代劇のワンシーンで使われるような、ねずみ小僧にでも遭遇しそうな雰囲気の路地裏。塀に囲まれて息苦しいのか、抜け道を探そうとしているのか、私は少し慌てているような、焦っているような感覚で辺りを忙しなく歩き回っている。
『ココは一体何処なんだ？』
不安になりながら歩き回っていると、誰も居ないのに何となく人の気配が感じられて来た。そして曲がり角から誰かが覗いたような気がして足が止まり、遂には抜け道の無い袋小路に追い込まれたようなとてつもない不安感に陥った次の瞬間、今度は草原のような景色が目の前に広がった。

視界に入る限りでは緑の草が広がり続いているような場所。そして私が立って居る所から数メートル先には小さな池があるのが見える。私は池に近付かないままに水面の辺りを笛の音を聴いていた時と同じようにただぼんやり眺めていた。すると池の中から何かが浮き上がって出て来た。
『恐竜！？　……いや、男だ！』
見たことも無い顔の男。子供ではないが年寄りでもない。若いようだが覇気は無い。もしかしたらさっきの路地裏でチラリと姿を見た男かもしれない。

　男の正体を確かめるかのように凝視していると、先ほど耳にしていた大きな竹の横笛が奏でるメロディーが聞こえて来た。すると横笛の音に反応したのか突如、男は銀色の鳥へと変化してしまった。
『あっ！』
　あっけなく飛び去って行く鳥。空を行く鳥を目で追いながらずっと空を見上げていた自分の首。その首が痛くなっていることに気付きカクンと垂れると、視界に入った地面には写真が一枚落ちていた。
『……写真？』
　一瞬、写真を拾うことを躊躇った。ところがあの大きな横笛の吹口を担当していたかつての友人一人がスッと現われ、その写真を拾って私にあっさり手渡してくれた。
「はい、どうぞ！」

　手渡された写真を見ると、そこにはピンクのフラミンゴが、その華やかな羽を美しく広げている姿があった。あまりの美しさに友人の存在も忘れて写真に見入っていると、私の中で何だか訳も無く嬉しいという気持ちが満ちて来るのを感じていた。そして感極まった時、私は突如うしろを振り返りその歓びを目の前の人物に告げていた。
　その人物とは、誰よりも私を愛してくれながらも若くして天国へ帰った優しい兄だったのである。　了